

# 外国人日本語学習者の予測能力と文法的知識

市川 保子

## 要 旨

本稿は、寺村秀夫（1987）が「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」で日本人学生に実施した調査を、外国人日本語学習者に行い、外国人の文法的知識に基づく予測の仕方が、日本人とどのように異なり、どのような問題点を持つか、また、外国人の予測能力と文法力との関連について考え、彼らに予測能力をつけるためには、どのような文法力が必要となるかを探る。

外国人の予測の仕方は、言語形式においてばらつきが大きく、用いられる語句・表現は日本人より限られていることがわかった。また、述語が同一の言語形式に収束していく速度は日本人より遅く、新しく与えられた語にのみ注意が行き、今までの語・文の流れを忘れて、その語との関係だけで文のつながりを予測しようとする傾向が見られた。

外国人にとって予測のために必要な能力は、単独の、また複数の言語要素から、文全体を見通す能力であり、そのための文法教授の方法が開発されるべきであると考えられる。

〔キーワード〕 外国人日本語学習者 予測能力 文法的知識 言語形式

## 1. はじめに

取り立て助詞「は」は主題を表すとも、対比を表すとも言われている。

(1)「私は○○です。」と自己紹介するときは「私は」に対して比較されるものは浮かんでこない。一方、(2)「私は肉は食べるが、・・」という文を聞くと、多くの日本人は「肉は」に対比を感じ、「(私は肉は食べるが、)魚は食べない。」のような文を予想するであろう。(1)の「私は」の「は」は主題を表し、(2)「肉は」の「は」は対比を表すと言われている。

日本人ネイティブスピーカーは「は」についての文法的な知識がなくとも、(2)のような文に対比を感じ、どのような文があとに続くかある程度予測することができる。次のような言語形式も聞き手(読み手)に何がしかの後文(・・部分)に対する(具体的な語句でなくても、どのような言語形式が続くかといった)ヒントを与えてくれる。<sup>1)</sup>

(3) 私、貯金は少ししか・・・

- (4) A：がんばってね。  
 B：はい。今度こそ・・・
- (5) 今から急げば終電に・・・
- (6) 500じゃ買えませんが、1,000も出せば・・・
- (7) A：一体、どうしたんですか。  
 B：ええ。角のところまでバイクに・・・
- (8) あの元気なおばあさんもとうとう・・・
- (9) いろいろ考えたんですけど、私にはどうしても・・・
- (10) あーあ、こんな会社、つくづく・・・

後文を予想させる要素が単独であることはまれで、複数の要素が統合されて予測につながると考えられるが、(3)(4)は取り立て助詞「しか」「こそ」の意味・機能、(5)(6)は従属節による意味的な制約(条件付け)、(7)は補語(名詞と格助詞)の述語への制約、(8)～(10)は「とうとう」「どうしても」「つくづく」の副詞の意味・機能によって後文が予想されやすくなっていると考えられる。

日本人ネイティブスピーカーならある程度備わっているこれらの文法的知識に基づく予測能力を、ノンネイティブである外国人学習者はいつ、どのように形成していくのであろうか。

寺村(1987)は日本人の文法的予測力について調査し、ネイティブスピーカーというものが「驚くほどの正確さで、しかもかなり先まで現れそうな語(の連なり)を予知するものだ」と述べている。

本稿は、寺村が日本人学生に実施した調査を外国人日本語学習者(以後外国人と呼ぶ)59名に行い、氏の論の展開にそって、外国人の文法的知識に基づく予測の仕方が、日本人とどのように異なり、どのような問題点を持つか、また、外国人の予測能力と文法力との関連について考え、彼らに予測力をつけるためには、どのような文法力が必要かを探ることを目的とする。

本稿で調査対象とした外国人は、筑波大学留学生センターで日本語・日本事情を学ぶ学部レベルの留学生33名(平成2年次23名、平成3年次10名)、同センター補講コース上級で学ぶ留学生16名(平成2年)、およびAFS交換中国人留学生10名(平成2年)<sup>2)</sup>である。いずれも2年以上の日本語教育歴をもち、日本人に混じって講義を受けることのできる(調査当時、実際に日本語の講義に参加していた)日本語能力のある人たちである。予測能力は学習者の日本語力と深く関わり、日本語力が高ければ高いほど予測能力も高いと想像される。したがって、本稿での考察は、日本語・日本事情クラスに参加できる程度の日本語力をもつ外国人の予測能力の考察と言える。<sup>3)</sup>

寺村が言うように、「文は談話の流れの中で発せられるもの」であり、「文の意味の複雑な層、相を全体としてつかむためには、文を外側から観て」考えることがなければならない。また、予測するためには文法知識以外に「語彙、音声、音韻、暗記、視覚、社会言語学的情報」などの知

識を必要とし、文法能力のみで、予測能力を云々することは一面的に過ぎる。しかし、一方で、文法が予測能力という複雑な総合体の一端を担っていることは事実であり、文法と予測能力との関連をとまげることができれば、「聞き取り」や「読み取り」の分野における予測能力の解明にも資すると考えられる。

## 2. 予測能力テストの概略

寺村（1987）が調査に使った文の全体は次のようである。

その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けてもらえと勧める人であった。（夏目漱石「こころ」）

寺村は、まず、「その先生は」と黒板に書き、日本人学生たちに、何でもよいから思いつくままにすぐその後続けて短い文を完成するように指示する。そして、ほとんどの学生が書き終わったところに、先の語句の下に並べて、「その先生は私に」と書き、先ほどと同様、このあとにどんな文が来るかを考えて、思い浮かんだらすぐ書くように指示する。その次はまた第3行目に上と並べて、「その先生は私に国へ」と書き、同じような作業をやらせる。寺村論文は、文の句切りの前半部分に詳しく、後半部分については簡単な言及しかないが、そこに現れたものだけを拾うと、文を次のように区切って調査に使ったと推察できる。

その先生は／私に／国へ／帰ったら／父の生きている／うちに早く財産を分  
[1] [2] [3] [4] [5]  
けてもらえと勧める／人であった。  
[6]

今、暫定的に [1] [2] の番号を施したが、寺村が詳しく取り上げているのは [4] までであり、[5] [6] については、簡単な言及があるのみである。筆者の調査ではさらに詳しいデータを得るために、[5] 以下をさらに細分した。「'」付きが本稿での調査の句切りである。

その先生は／私に／国へ／帰ったら／父の生きている／うちに早く／財産を  
[1]' [2]' [3]' [4]' [5]' [6]' [7]'  
／分けてもらえと／勧める／人／であった。  
[8]' [9]' [10]'

## 3. 日本人と外国人学習者との予測能力の比較

各句切りごとに日本人と外国人の予測の仕方は異なりを見せるが、まず、両者の大まかな違い

をまとめておく。

寺村（1987）の日本人に対する予測能力テストの結果は次のようにまとめられる。

- 1) 日本人ネイティブスピーカーはかなり早い段階（[2]「その先生は私に」）で、与えられた語句（ここでは補語）を受ける述語の言語形式の型（動詞文か名詞文、形容詞文かといった型）を正確に（原文と一致して）予測している。
- 2) 述語の一つの言語形式に収束される早さは、述語がどのようなテンスをとるかにおいても同じ傾向がみられ、述語の種類（動詞であること）を予想した段階で、その多くの者が同一のテンス（過去）を予想している。
- 3) [2]以降、語句が付け加わることで、予測文は修正を受けるが、ほとんどの日本人は、前段階で予測した述語の言語形式をそのまま受け継ぎ（寺村のことばでは「先送り」し）、新たに付け加えられた語句とのつながりに対しては、部分的に修正を加えているのみである。
- 4) 日本人の予測の仕方は、言語形式においてばらつきは少ないが、その中での表現的内容（使われる語句・表現）は豊かである。

一方、筆者が外国人に対して行ったテストの結果には、次のような特徴があった。

- 1) 外国人の予測の仕方は、与えられた語句を受ける述語の言語形式においてばらつきが大きい。
- 2) 述語が同一の言語形式に収束していく速度は日本人より遅く、日本人より1段階位あとになって（日本人より1語句多く得て）日本人ネイティブ型の予測に近づく。
- 3) 外国人は新しく与えられた語にのみ注意が行き、今までの語・文の流れを忘れて、その語との関係だけで文の続きを予測しようとする。
- 4) 「先送り」は日本人同様できるが、日本人がほぼ全員に先送り傾向が見られるのに対し、外国人は約半数に限られ、残りの者は語句を得るごとにそれに続く述語の言語形式が変わる。
- 5) 予測文に使用された語句・表現については、日本人は与えられた語句にあまり支配を受けず多彩で自由な文が作れるが、外国人は、与えられた語句にとらわれ予測文の表現的内容が乏しい。

外国人の予測能力を、彼らの産出したもの（書いたり、話したりしたもの）から推測することには常にある程度の危険性がつきまとう。日本人は予測したものを文法的に正しく産出することができるが、外国人は、予測は正しくできていても、文法的、また語彙的知識の欠如のために正しく産出できないことがある。一方、調査者は産出されたものから推し測るほかに、ときに産出者の意図を正確に読めないことが起きる。本調査では、文法的に間違っはいるが、産出者の予測の仕方が明らかなものはデータとして扱い、まったく意味の通じないものは、あえて分類せ

ず、データから省いた。

#### 4. 外国人に対する調査の結果

本節では寺村の調査にそって、句切り毎に外国人の予測の仕方を、日本人との結果と比べながら見ていく。

##### 4.1 句切り [1] について

外国人が「その先生は」に続けて書いた文のいくつかを次に示す。(紙面の関係上、平成3年度日本語・日本事情の学生10名のもものを示す。文は原文のまま。)

[1] 「その先生は・・・」

- ① とっても実力もあるやさしい人です。
- ② みんなに尊敬されている。
- ③ 音楽がすきだそうだ。
- ④ とてもきびしい先生です。
- ⑤ きれいですね。
- ⑥ きびしそうです。
- ⑦ とてもきびしいです。
- ⑧ 毎日何冊もの本をかかえて教室にはいつてくる。
- ⑨ 大変きれいです。
- ⑩ おもしろい先生ですが勉強にきびしいよ。

[1] 「その先生は」を聞いてどのような文のつながりを予想したかを、述語の種類で分類すると次のようになった。(上の外国人の予測文では、名詞+ダ①④、形容動詞+ダ③⑤⑥⑨、形容詞⑦⑩、動詞②⑧となる)

<[1] から予想された述語の種類> (単位%)

	名詞+ダ	形容動詞+ダ	形容詞	動詞
日本人	21	14	5	60
外国人	30	13	30	27

(日本人の結果は寺村(1987)のもの。寺村の分類は実数を用いているので比較を容易にするために%に直して表した。小数点以下四捨五入。寺村の総数は45名、筆者のそれは59名である。)

述語の種類からわかることは、日本人に動詞文が多く（60%）、外国人に名詞文・形容詞文（形容動詞を含める）が多い（計73%）ということである。「その先生は」と聞いて、日本人では「僕にこう言った。」「突然教室を出ていった。」「私にいろいろなことを教えて下さいました。」「生徒を叱る。」「駅で新聞を買った。」といった動作を予測する者が過半数を占めるが、外国人は、逆に「日本語の先生だ。」「とてもきびしい。」など、「その先生」について何らかの特徴づけを述べる名詞文・形容詞文を選んだ者が多い。外国人が選んだ形容詞文の中では「きびしい」「やさしい」「きれい」が集約的に現れ、使用された形容詞の過半数を占めている。

[1]の「その先生は」を聞いて日本人の60%が動詞文を予想し、外国人は27%しか動詞文を予想しなかったことは、日本人が「その先生は」に具体的な動作を予想する要素を感じ、一方、外国人は感じなかったということになる。具体的な動作を予想する要素とは何かということであるが、一般に「Nは」は名詞的、あるいは形容詞的述語の上に立つときは無格で、動詞的述語の上に立つ場合は何らかの格をもつ（有格）という考え方があり、<sup>9)</sup>「その先生は」を聞いて、日本人の多くは何らかの格（ここでは主格）を想定し、動詞文を予想したと考えられる。一方、外国人は「その先生は」だけから無格の主題の機能しか感じず、「その先生」についての何らかの特徴づけを述べる名詞文・形容詞文が多く現れたと考えられる。

また、「その先生は」の代わりに「この先生は」、また「あの先生は」とした場合、動詞文の現れる度合に変化が出てくるのではないかという想像もできる。<sup>9)</sup>「その先生は」の代わりに被験者のよく知っている特定人物、例えば「〇〇先生は」に代えた場合はどうか。

いずれにしろ日本人ネイティブの多くは「その先生は」という語句だけで、その「Nは」が無格か有格かを判断し、何らかの特徴づけを表す文か具体的な動作を表す文かを選択していると言える。

#### 4. 2 句切り [2] について

外国人が [2] 「その先生は私に」に続けて書いた文のいくつかを次に示す。

[2] 「その先生は私に・・・」

- ① いい本をしょかいしてくれた。
- ② 日本語をおしえてくれました。
- ③ 英語を親切に教えてくれた。
- ④ プレゼントをくださいました。
- ⑤ ほめてくれました。
- ⑥ 宿題を渡した。
- ⑦ 「参考書を持って来てくれないか。」と頼みました。
- ⑧ いろいろな問題をききました。

⑨きびしい。

⑩作文を書かせます。

[1]の「その先生は」に「私に」が付いたことにより、[2]における述語の分類では、日本人が全員動詞文を、また、外国人も90%強の者が動詞文を予測している。

〈[2] から予想された述語の種類〉(単位%)

	名詞+ダ	形容動詞+ダ	形容詞	動 詞
日本人	0	0	0	100
外国人	3	2	3	92

予測された動詞の内訳は次のようである。

〈[2] から予想された動詞〉(単位%)

日本人	言う 30	求メル 5	頼む 2	助言する 2	くれる 37	与える 5	その他 19
	伝達行為 39				授受 42		
外国人	聞く(質問する) 4		頼む 2		くれる 51	もらう 2	その他 41
	伝達行為 6				授受 53		

予測された動詞のテンスの割合は次のようであった。( )は[1]における動詞文の割合を示す。<sup>6)</sup>

〈[2] から予想された動詞のテンス〉(単位%)

	基本形		過去形	
日本人	(60)	5	(40)	95
外国人	(86)	37	(14)	63

[2]における、日本人と外国人の予測の違いをまとめると次のようになる。

- 1) 日本人の予測は大きく2つに集約される。1つは、授受動詞の「くれる／くださる」(42%)類であり、1つは「～と言う／おっしゃる」(39%)を中心とした伝達行為の動詞で、両者で81%を占める。また、それらの動作は1回限りの動作を表し、過去形をとっている。また、日本人の伝達行為の表現は「～せよ／～するように言う」の形が半数以上に集約されている。
- 2) 外国人は[2]の段階では、伝達行為の動詞はほとんど現れず(したがって、日本人のように「～せよ／～するように」も現れない)、授受動詞の「くれる／くださる」が半数を占め、残りは言語形式が集約されず多岐にわたっている。名詞+だ・形容詞・形容動詞をとる者(8%)もあり、ばらばらの形をとっているとも言える。
- 3) 「私に」を1句切りとしないで「とって／対して」を付けて続けようとするものが5例あった。「(私に)とって、非常にたすかりました」「(私に)とって特別な先生です」「(私に)とって気に入らないスタイルだろうか」「(私に)とって厳しいである」「(私に)対して厳しい教え方を使う」であるが、日本人は「に／に対して」を1語でとらえる意識があるため、これは外国人特有の予測の仕方であると考えられる。
- 4) 外国人は授受動詞の「くれる／くださる」が半数を占めたが、そのうち「教えてくれる／くださる」が50%を占め、2人に一人が使っている。一方、日本人は18%で5～6人に1人の割合であり、外国人学習者がいかに「先生←→私に」の關係に型通りの表現(「教える・習う」)しか想像できないかがわかる。

#### 4. 3 句切り [3] について

[3]「その先生は私に国へ・・・」になると日本人の予測文には同じ文が現れ、[2]のとき以上に「～せよ／ように言う」という表現に集約される。テンスに関しても全ての文が過去形をとっている。一方、外国人には少数ではあるが、「引き渡そうと思っている」「連れていただきます」のように依然、基本形をとる者がいる。

外国人が「その先生は私に国へ」に続けて書いた文のいくつかを次に示す。

[3]「その先生は私に国へ・・・」

- ①一度帰ってくるのがいいのではないかと言いました。
- ②かえるように命令しました。
- ③変える方法を教えてくれた。
- ④手紙を書きなさいとすすみました。
- ⑤プレゼントを贈りました。



- ⑥連れて行った。
- ⑦遊びに来てと誘われた。
- ⑧この辞書を持って帰るようにたくした。
- ⑨手紙を書いて下さいとおしゃた。
- ⑩手紙を書いておやに心配しないようよく出してくださいと言いました。

〈[3] から予想された動詞のテンス〉 (単位%)

	基本形	過去形	無 答
日本人	0	100	
外国人	12	85	3

また、予想された動詞を分類すると次のようになった。

〈[3] から予想された動詞〉 (単位%)

日本人	伝達行為 96	思う 2				その他 2	
外国人	伝達行為 54	思う 2	授受 9	使役 19	オチ 3	その他 10	無答 2

(伝達行為としてまとめた動詞の内容はほぼ [2] に同じ。「思う」は伝達行為と考えられないので独立させた。「オチ」は主題に対応する動詞のない場合である。(例 その先生は私に国へかえりなさい。)

[3] における、日本人と外国人の「その先生は私に国へ・・・」に対する予測の違いは次のようにまとめられる。

- 1) 日本人は [2] 「その先生は私に・・・」で半数が「～と言う」類を予測し、その割合は [3] で96%になった。一方、外国人学習者は [2] では「～と言う」類はほとんど現れなかったが、[3] 「その先生は私に国へ・・・」で54%に上った。「～と言う」について言えば、外国人は日本人に比べ、補語が1つ多くなってから、日本人に近い予測ができ始めると言えそうである。
- 2) 「～と言う」の中味は、日本人が「～せよと／～するように」で大半を占めるのに対し、外国

人学習者には「～せよと／～するように」は少なく、「～てください」「～ほうがいい」など多岐にわたっている。外国人には「命令形＋と」「～する＋ように」という言語形式は習得の難しい項目であると考えられる。")

<[3] から予想された「～と言う」に前接する形> (単位%)

	～ように	～せよと	～なさいと	～すると	～てください	～しようと
日本人	33	30	12	5	0	0
外国人	8	0	5	3	10	5

- 3) [2] で3例現れた使役動詞が [3] で10例になった。使役の例としては「かえさせた」「いかせた」「このものを持って帰させた」「帰らせた (同例他に2例)」「国へ帰らせたのです」「帰らせたがっていない」「帰国させる先生です」と、「(その先生は私に国へ) 帰らせる」の形が多くを占める。彼等は「私に」と「私を」を混同しており、受動態における格助詞の取り違い、理解不足が予測に影響を与えていることがわかる。
- 4) 日本人の10%が、「国へ」までを聞いて「帰ったら」を予測している。外国人学習者は5%が予測している。

#### 4. 4 句切り [4] について

外国人が、[4]「その先生は私に国へ帰ったら」に続けて書いた文のいくつかを次に示す。

[4]「その先生は私に国へ帰ったら・・・」

- ①将来何をしたいのかと聞きました。
- ②日本語を忘れないように勉強をしつつけるようにいいました。
- ③何をしたいかと聞いた。
- ④なにをになりたいと質問した。
- ⑤手紙をくださいとおっしゃいました。
- ⑥連絡してくださいと言った。
- ⑦また来てくださいと言いました。
- ⑧「すぐ手紙を書いてください」といいました。
- ⑨手紙を書いてくれとおっしゃった。
- ⑩又、手紙、まあ、なんでもよいから書いてくれませんかと言いました。

日本人では [4] の予測文は [3] の場合と型としては変わりがない。一方、外国人は伝達行

為を表す動詞が[3]より30%強増えている。また、「～と言う」の中味は「～てください」が32%、「命令+と」5%、「～ように」が8%と若干増えている。

〈[4] から予想される動詞〉(単位%)

外国人	伝達行為	思 う	く れ る	オ チ	その他	無 答
	86	2	3	2	7	3

〈[4] から予想された「～と言う」に前接する形〉(単位%)

外国人	～ように	～せよと	～なさいと	～すると	～て下さいと	～しようと	～ないで
	8	5	5	3	32	5	3

「その先生は私に国へ帰ったら・・・」の「国へ帰る」のは誰か、先生か私かは、寺村の日本人対象の調査ではすべての者が「私」の行動と解釈している。外国人もほとんどが「私」と解釈しているが、次の3例は文字通りにとると「先生」が国へ帰ると解釈しているように伺える。

- (1) その先生は私に国へ帰ったらすぐ電話で連絡すると言った。
- (2) その先生は私に国へ帰ったらおみやげを持って来ますと言いました。
- (3) その先生は私に国へ帰ったら手紙をおくります。

しかし、先生が学生に「すぐ電話し」たり、「おみやげを持って来」たり、「手紙をおく」ったりするのは不自然なので、動詞の末尾を命令や依頼の形(「すぐ電話で連絡しろ／するように」など)にすることができなかつただけとも解することができる。

日本人はなぜ「その先生は私に国へ帰ったら」を聞いて、「先生が国に帰る」ととらないのだろうか。次の文のような予測もできるはずである。

- (4) その先生は私に国へ帰ったら引退して執筆活動をしたいと言った。

日本人の予測の過程としては、「その先生は(私に)」から「その先生は私に言った。」が予想され、先生が学生の「私」に言うのだから「～せよ／するように言った」であろうと予想し、予想したものは命令・依頼または伝言の形をとるから、「私が国へ帰ってからすべきこと」というふうに進められ、「国へ帰るのは私」と予想したと想像できる。外国人の予測過程が日本人と同じかど

うかはよくわからないが、それに加えて語彙的に使用領域幅のせまい外国人は、「国へ帰る」は即、「自分のこと（ここでは私のこと）」したがって「自分が帰る→私が帰る」と解したと推測することができる。

#### 4. 5 句切り [5] について

外国人が、[5]「その先生は私に国へ帰ったら父の生きている」に続けて書いた文のいくつかを次に示す。

[5]「その先生は私に国へ帰ったら父の生きている・・・」

- ①うちに結婚するのがいいと言いました。
- ②あいだ孝を実行するようにすすめました。
- ③生活方法を習うようくどいた。
- ④うちに親孝行をなさいとすすめました。
- ⑤ときの写真を送ってくださいとたのまれました。
- ⑥ことをみんなに伝えてほしいと言った。
- ⑦ことを知らせてほしい。
- ⑧あいだに父のそばにいろと指示した。
- ⑨故郷を訪ねて見ることを頼んだ。
- ⑩うちに、きちんとおやのことを見守って下さいと言いました。

次の数字で見られるように、外国人の予測文のほとんどが伝達行為の文であることは、[4]のときと変わりはない。

<[5] から予想される動詞> (単位%)

外国人	伝達行為	思 う	く れ る	オ チ	そ の 他	無 答
	84	2	7	2	5	5

(上の表では「頼んでくれた」のように伝達行為と「くれる」の重複があり、%が100を超えている。)

句切り [5] では「父の生きている」の後ろをどう続けているかがポイントとなる。日本人の場合は「父の生きている」の次に来るものとしては「うちに」か「あいだに」だということをほとんどの者が予想している。一方、外国人の場合は、次の表のように「うちに」「あいだに」を含むトキ

に関する従属節と、「こと」やその他の名詞にかかる連体修飾関係を予想する者にとり分される。

〈[5] から予想された従属節その他〉(単位%)

	うちに	間に 間 間の	とき ときに	限りに	こと	安否 消息 便り	故郷 町 家	ところ	価値観 生活方法 いみ	その他	無答
外国人	17	15	7	2	19	7	9	2	5	9	9
	～トキ41				連体41						

～トキも連体も従属節を構成する要素であり、日本人も外国人も文末の述語は[4]のまま先送りにして、それにかかる従属節を受ける言語形式、表現を探ることになる。外国人には「・・・しているうちに」という言語形式が日本人のように身に付いておらず、「父の生きている」であるから「の」が連体修飾節の主語であるとの解釈も手伝って、「うちに」類と連体修飾節とに2分されたと考えられる。

#### 4.6 句切り[8]について

句切り[6][7]については紙幅の関係上、省略する。外国人が、[8]「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けてもらえと」に続けて書いた文のいくつかを次に示す。

[8]「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けてもらえと・・・」

- ①言いました。
- ②安心できるときそってくれました。
- ③促した。
- ④君の将来にとって大切なことだと言った。
- ⑤おっしゃいました。
- ⑥言った。
- ⑦誰かと結婚しないとしました。
- ⑧命令した。
- ⑨祈ってくださいました。
- ⑩勧めてくださいました。

句切り [8] では、「分けてもらえと」が正しく理解できなくて、予測が間違っている例がいくつか見られた。誤解の仕方は、「分けてもらおうと」(②)、「分けてもらったら」(⑦)と条件節に解釈している者が大半で、少数ではあるが「分けてもらうのは」(④)と名詞節に解釈している者があった。節末の理解不足が予測を妨げる好例になっている。以下にもう少し外国人の誤用例を示しておく。

[条件節「分けてもらおうと」との混同例]

- (1) いいなあ～と言いました。
- (2) 父がかなしがるといった。
- (3) 社会を作ることができるわけだと言った。

[条件節「分けてもらったら」との混同例]

- (1) 独立の生活ができるように頑張ってくださいと励んでいた。
- (2) その部分も父にまかせる方がいいとすすめました。

[名詞節との取り違え]

- (1) 君の将来にとって大切なことだと言った。
- (2) 危険な事だと父に伝えたと言いました。

このような文・節末の理解不足は日本人にはないものであり、外国人の文理解成否の重要なポイントとなるであろう。

#### 4.7 句切り [9] [10] について

日本人の場合は、寺村論文には「・・と勧める」で止めると、その後は「人だった」か「のであった」が来るということをやはりほとんど全員が予測しているという記述がある。外国人の予測文のいくつかを示す。

[9]「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けてもらえと勧める・・・」

- ①ことを言いました。
- ②と言いたがったでしょう。
- ③人だ。
- ④ということだ。
- ⑤ことをした。
- ⑥のが不思議なのである。
- ⑦けれども、私はそうと考えない。

⑧ことははっきりおぼえている。

⑨のだった。

⑩人が必ずいるから、父のことをよく考えれば、そういう人とあまり話をしない方が良いと  
いった。

外国人にとって句切り [9] を続けるのは難しかったらしく、無答が増えていること、予測の仕方がかなり多岐にわたっていることが特徴としてあげられる。ごく大まかに分類してみると次のようになる。

〈[9] から予測された語句〉 (単位%)

外国人	～のだ／のです ／のだった 5	人だ／人です ／先生だ 9	ことがある ／ことがあった 9	こと～ 12	～が／けど ／けれど 20	その他 26	無答 19
-----	-----------------------	---------------------	-----------------------	-----------	---------------------	-----------	----------

無答の次に多かったのが、「～が／けれど」に代表される、⑩のように文をまた延々と続けようとするものである。日本人であれば、文の終息の頃合がわかり、この辺で文が終わるだろう、これ以上長くなることはないだろうと判断がつく。外国人はそのような判断がむずかしいと考えられる。

寺村には句切り [10] に関する言及はない。外国人については、句切り [10] は [9] と似ており「である／だ」で打ち切ろうとする者 (34%) (⑤⑧⑨)、いろいろな格助詞を付けて文を伸ばそうとする者 (①④⑥⑦⑩)、その一つとして「～がいる」と存在文を使って文を続ける者 (①⑦) も見られた。[10] については外国人の予測文を示すにとどめる。

[10] 「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けてもらえと勧める人・・・」

①人がいるかどうかを聴きました。

②のように悪い人ではなからう。

③のような現実派の人だ。

④がよくないと言った。

⑤です。

⑥が信じられないと言った。

- ⑦が先生しかありません。
- ⑧なんです。
- ⑨であった。
- ⑩の意見を聞きとってくださいと言ってくれました。

## 5. まとめ

以上、寺村論文にそって外国人学習者の予測の仕方を日本人と比較しながら見てきた。日本人、外国人を問わず、後ろに続く語句や文を予測するためにはさまざまな能力が必要であることがわかる。句切り [1]～[10] の観察から次のような文法力が予測に必要であると考えられる。

### 1) 文構成上の予測能力

- (1) その文の種類・文性（名詞文か形容詞文か動詞文か等の）を予測することができるか。
- (2) その文が特徴づけ・性状描写を表すか、または出来事・動作・行為を表すかが予測できるか。
- (3) その文が特徴づけ・性状描写を表す場合、種類・性質を表すか、または状態を表すかが予測できるか。
- (4) その文が出来事・動作・行為を表す場合、1回きり・個別的事象を表すか、またはくり返し・習慣的・一般的動作・作用を表すかが予測できるか。
- (5) その文のテンス（基本形をとるか過去形をとるか）が予測できるか。
- (6) その文が肯定か否定かが予測できるか。
- (7) 補語の格関係から後ろに続く述語の種類が予測できるか。
- (8) その文が終わるか続くか（文として終息するか、従属節として続いていくか）が予測できるか。
- (9) その文が従属節となる場合、どのような機能の連用修飾節となるかが予測できるか。（引用・トキ・理由・条件（順接・逆接）等）
- (10) その文が連体修飾節となるかが予測できるか。
- (11) その文のヴォイス（能動態か受動態か使役態か可能態か等）が予測できるか。
- (12) その文がまもなく終わろうとするとき、その文末のムード形式（はずだ・ものだ・なければならぬ・かもしれない等）が予測できるか。
- (13) 取り立て動詞（「は・も・だけ・でも・しか」等）から対比される、語句や文が予測できるか。
- (14) 従属節の前件から、後件の言語形式、表現内容を予測することができるか。
- (15) 文に動作主、所有者等の省略があるとき、それが誰でどの述語に対して立つかがわかるか。



## 2) 語彙上の予測能力

- (1) 副詞のもつ意味から後ろに続く語句、文が予測できるか。
- (2) 副詞の持つ呼応関係から後ろに続く語句、文が予測できるか。
- (3) 指示語の種類(「こ・そ・あ」のいずれか)によって後ろに続く語句や文が予測できるか。
- (4) その語句が対比関係を持つ語句がわかり(男 $\leftrightarrow$ 女、子ども $\leftrightarrow$ 大人等)、後ろに続く語句・文が対比的に予測できるか。
- (5) ある語句を聞いて、それを受ける述語が予測できるか。
- (6) 慣用的表現で、その一部を聞いて残りが予測できるか。
- (7) 接続詞の意味がわかり、その後にはどのような文が続くかが予測できるか。

どの項目にも共通して言えることは、予測能力とは、一つ一つの字句に支配されることではなく、単独の、また複数の言語要素から、文全体を見通す能力であると言うことができる。これらの予測に必要とされる能力は、日本人が長期にわたって積み上げて身に付けている、そして外国人が身に付けるためには時間のかかるであろう文法的、語彙的知識が多い。その中には、その語句のもつ固有の意味だけでなく、1)の13)、2)の(2)~(6)のように、日本の社会通念、常識、広く日本の文化的要素を知らなければ予測されにくいものも含まれる。<sup>9)</sup>

文全体を見通す文法的能力(社会通念、常識、文化的知識も含めて)は、ある程度の日本語力が備わって築かれる総合的な力であると同時に、日本語力養成の初期の段階から方向付けをなされるべき能力であろう。

ボトム・アップ、トップ・ダウンということが言われるが、文法的知識の教授にも従来のボトム・アップ(部分から全体への積み上げ)方式に加えて、トップ・ダウン方式とでも言うべき、全体を見通す能力を養う教授法の開発が急がれる。

## 注

- 1) 参考文献3には、聞き取り練習指導の一つに「文法の知識を利用した練習」があげられ、「とくに表現文型等を考えた場合、途中まで聞けば、あとはいちいち聞くまでもなく、簡単に予測がついてしまうことが少なくない」と述べられている。そこに取り上げられている例からいくつかを借用した(4)はP35より借用したものである。
- 2) AFS制度にもとづき、中国から招聘された中学・高校の教師である。
- 3) 筑波大学では他の多くの大学と同じく、学部入学のためには日本語能力テスト1級の能力が必要である。本稿の調査対象留学生は、ほぼ日本語能力テスト1級の日本語力があると考えられる。
- 4) 参考文献5参照

- 5) 同僚の酒井たか子氏は補講コース上級の学生に調査を行われたが、「あの先生は」で予測文を作らせると動詞文の過去が多くなったそうである。
- 6) 寺村の調査で日本人が基本形を使っていたのは次の2例であった。

その先生は私に助言をする。  
その先生は私に冷たくあたる。
- 7) 上の例は「言う／おっしゃる」に絞ったもので、「～か」が現れる「聞く」は対象としていない。他に外国人のみが予測しているものには、「～てほしい」「～て」「～方がいい」「～したまえ」がある。
- 8) 参考文献2および6参照。吉川(1988)の言う「場面のプロトタイプのスクリプト＝シナリオ」はこれに当たると考えられる。

#### 参考文献

1. 寺村秀夫(1987)「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』第6巻 第3号 明治書院
2. 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
3. 土岐 哲(1988)「聞き取り基本練習の範囲」『日本語教育』64号 日本語教育学会
4. 當作靖彦(1988)「聴解能力開発の方法と教材—聴解のプロセスを考慮した練習—」『日本語教育』64号 日本語教育学会
5. 三上 章(1954)『現代語法序説』復刊 くろしお出版1972
6. 吉川千鶴子(1988)「場面のスクリプトと省略現象」『日本語学』第7巻 第3号 明治書院